

安楽死と尊厳死にはほとんど違いがないように思われているが、私は「死」の迎え方に大きな違いがあると思う。安楽死とは現代の医学では治る見込みがない病気になった患者を苦痛なく死なせることであり、尊厳死とは末期状態の患者に無益な延命措置をせず人間としての尊厳を保ちながら自然な死を迎えさせることである。前者は意図的な作為によって、後者は不作為によるという違いがある。

これらの死の概念が社会的に意識されるようになったのは、新しい人権の一つである「自己決定権」が自覚されるようになってからだと言われる。それまでは「死」がどうあるべきかが問題にされることはあまりなかった。例えば、人は病気になると治療を受けつつ病院か自宅で静かに亡くなった。死は忌み嫌われるものであり、人の目に触れさせないほうが良いと思われていたのだと思う。

しかし、人間の尊厳や自分らしさを大切にする考え方が広めるにつれ、人間としての生き方の延長線上にある死の方についても「あるべき姿」を求めるようになる。その際、人間の尊厳を損なうような苦痛や植物状態を回避するために安楽死や尊厳死が議論されるようになったのだと考える。

「人間として」どのように死ぬかと決めるのは自分自身である。ただ、私はそのこと自体は当然のことだと思う反面、新たな問題も生まれてきたと思う。それは安楽死や尊厳死を「便利な死の方」として当たり前のように求める傾向が強まるという点だ。確かに人が痛みで苦しんだり人工呼吸器だけで生きていたりする姿を見るのはつらい。しかし、「生」が個人を取り巻く人々との愛情や友情で成り立っているのだから、「死」も周囲の人々との関係で考えるべき側面もあるのではないか。家族にしてみれば、患者が少しでも長生きしこの世界に存在してほしいと願うのは自然な感情だ。

日本では安楽死は法的に認められていない。しかし、尊厳死は法律はないが憲法から導かれる「自己決定権」により認められていると解釈されている。実際の司法の判断でも認められたケースがあるし、尊厳死を明文で法的に認めようという動きもある。私はこれらの流れには賛成するが、「便利な死の方」とならないように個人の意思と家族の思いのバランスに配慮して慎重に検討されるべきだと考える。